

【弁護士日記】

死刑囚のつぶやき

美和勇夫

一九七〇年の日米安全保障条約をめぐる学生運動の過激化の果てに、十七名の命が奪われた「連合赤軍事件」の最高裁判決が、浅間山荘の事件から二十一年ぶりに言い渡される。検察側は、「日本犯罪史上、空前の凶悪重大事件」と決めつけてい

子、坂口弘の死刑は動かないであろう。(私が弁護士になりたての頃、この事件の弁護支援を依頼されたことがあるが、捜査の調書だけでトラックにいっぱい分はあるということでお断りした)

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

被告の坂口弘(46歳)
は、事件後五年たった時

国外へ逃走してゐたはずであった。
しかし、その時銃を手にしての革命「唯銃主義」を総括（反省）していく坂口は、釈放を拒否してひとり拘置所にとどまつた。今、坂口弘は死刑囚としての心境をうたう短歌を掲載されるに至つてはいる。

れの中で、未熟ではあるが被告人なりの「社会の変革」を純粹に求めていた事件である。しかしながら、しゃくし定規の法はいかに坂口が改心したとしても「極刑」で迫ることであろう。

「階級違うだけでも
「上命下服」は、今の役所
でもみられる通りで、吉良
が浅野をしがりつけるぐ
らいは、主が飼犬をしか
るのと少しもかわりはし
ない。当たり前のことで
ある。(犬の方から文句を
言えるスジアイは全くな
い)ともかく午前に刃傷

いた人であろうから、殿
中で刃をぬけば、お家断
絶の上、切腹ですぞ」と
か「切腹の作法はこのよ
うでござるぞ」というよ
うなことは、日頃大石内
蔵助も教えてはいなかっ
たであろう。従つて、即
日の「切腹命令」ではう
ろたえるばかりで、とて
も自身総括（反省）など

坂口弘とて浅間山川事
件で逮捕された即日に、
死刑執行であれば「俺達
は間違ってはいない。間
違っているのは裁くお前
達だ」と言っていたかも
しれない。

[View all posts by **John**](#) [View all posts in **Uncategorized**](#)

「坂口を人質と交換に国外シップールで人質を取り、
に放逐せよ」と迫った。この時坂口が感じていれば政府の「超法規的措置」で坂口は死刑囚から一転して、自由の身となつて

「わが一生、半にあると
も極刑をまぬがれたらしく
と思うときあり」
まさにせつせつたる彼の
心境であろう。

大名より格上の位の「高家衆」筆頭で大名に礼義作法を教える立場、兵隊の位でいえばいなか大名の浅野とは一階級ぐらいいは及んだのは三十五歳の年であつた。吉良上野介は、

には「切腹」の判決が言い渡され、夜の六時には処刑（介錯）であった。世は太平の元禄の時代に赤穂五万石の大名としてのそれほどの苦勞もななく赤穂で頂点に君臨して

「風さそふ花よりもな
ほわれはまた春の名
残をいかにとやせむ」
という秀句を自分でもの
にする境地には、とうて
いなれなかつたであろう。

194